

成大中家と《蒹葭雅集図》：18世紀における庶孳文人家の収蔵活動

鄭, 敬珍

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

77

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

11

(発行年 / Year)

2016-10-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013383>

成大中家と《兼葭雅集図》

——18世紀における庶撃文人家の収蔵活動——

人文科学研究科 日本文学専攻
国際日本学インスティテュート

博士後期課程3年 鄭 敬珍

はじめに

一. 《兼葭雅集図》をめぐる朝鮮側の記録

- 李徳懋の記録から
- 成大中の『青城集』から
- 成海応の「書画雑職」から

二. 成大中家をめぐって

- 庶撃文人家としての成大中家
- 成大中家の書画収蔵と「書画雑職」

おわりに

引用・参考文献

はじめに

本稿は、1764年（旧暦、以下同様）朝鮮通信使行の際に大坂で制作された木村兼葭堂（以下、兼葭堂）筆《兼葭雅集図》を取り上げ、《兼葭雅集図》をめぐる朝鮮側の記録と、依頼者・成大中の家で家伝していった過程を分析したものである。

筆者はこれまで拙稿を通して《兼葭雅集図》の制作に関わっていた人々について、さらには《兼葭雅集図》の絵の表現上の特徴などに焦点を当て分析を行ってきた¹。《兼葭雅集図》制作をめぐるのは、これまで文才に長じていた朝鮮の文士と日本の文人との交流といった限定的見方から離れ、文人趣味の共有を基板にする関係性から生まれた創造という見解を示した。本来、士大夫の余技とされてきた文人趣味が士大夫とは性格を異にする社会的地位や生業の文人たちによって嗜まれていたことが、その背景に働いていることにも注目した。さらに、《兼葭雅集図》の絵の分析を通して、描かれている園林・兼葭堂が実在する空間でありながら「理想的な文人空間」として演出されている可能性も提示した。

《兼葭雅集図》の有する意義は、依然として検討すべき点が多い。長年その所在が不明であったため、十分な考察が進められてこなかったことであり高橋博巳や金文京、김성진（キムソンジン）などによる先行研究の成果は本稿の考察のうえで重要な土台となっている²。だが再検討すべき点が多いことは否定できない。

本稿ではまず、根源的な問いかけとして、朝鮮通信使の書記の一人である成大中（ソンデジュン・1724~1776）が、どのような目的をもって《兼葭雅集図》の制作を依頼したのかに注目したい。さらに、その問いかけを成

¹ 鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶撃文人、「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」『日本研究』第52集、2015、鄭敬珍「《兼葭雅集図》にみる文人世界、18世紀の日韓文人が共有した空間」『国際日本学』第14号、2016（近刊予定）

² 1764年の朝鮮通信使の製述官や書記と兼葭堂会との交遊については、個々の文献については引用・参考文献のリストを参照されたい。

大中家における《兼葭雅集図》と、家伝との関連性を中心に考えていきたい。結論から述べると、そこには一人の庶撃文人の文人趣味の枠を越えた、朝鮮の知識人の家の書画收藏という家業との結びつきがあると考えられる。なぜなら、成大中家は先代から書画の蒐集や收藏に力を入れていたからである。さらに、成大中の父の代からは明の『唐詩画譜』を家伝しながら朝鮮の事情に見合った画譜作りに挑むなど、書画に対する高い興味や知見を持っていた。そのような書画の蒐集や收藏行為は、18世紀、朝鮮の知識人の家における文人意識の表れであったとも言えるのではないかと筆者は考える。

次に、朝鮮の文人たちが《兼葭雅集図》を鑑賞し評価したという朝鮮側の記録をみると、当時、朝鮮の文人の間に書画を鑑賞する文人ネットワークが存在していたことが推察できる。本稿では、依頼者・成大中を中心とする朝鮮側の記録を頼りにしながら、1764年の通信使行と、《兼葭雅集図》が媒介となった彼等の交遊について検討を加えることにする。とりわけ、両班の家に生まれたとはいえ、経済的に決して恵まれていなかった朝鮮の庶撃文人たちの書画を媒介とした交遊は、金銭の授受を介さない贈答や書画の借覧を通して支えられていたと思われる。

以上のことを明らかにすべく、本稿では第一章で、《兼葭雅集図》をめぐる朝鮮側の記録を分析し、第二章では成大中家という庶撃家に焦点を当てながら、收藏活動と家業の関連性について考察する。以上のことを通して、《兼葭雅集図》が朝鮮に渡った後、成大中家に家伝した事実の有する意義を明らかにしたい。

一. 《兼葭雅集図》をめぐる朝鮮側の記録

1764年の朝鮮通信使の帰国後、朝鮮の文人の間で《兼葭雅集図》がどのように受け入れられていたのかを論じる前に、《兼葭雅集図》の制作過程について概観しておきたい³。

《兼葭雅集図》の制作時期は、1764年4月朝鮮通信使が帰路のため逗留した大坂で通信使の武官の一人、崔天鐘が対馬の訳官・鈴木伝蔵に殺害される事件が発生し、事件収拾のため約一か月間、大坂に留まったことと関連がある。殺人事件の発生後、製述官・南玉一行の宿舎への日本人の出入りは厳しく制限されていたが、兼葭堂会の一人で僧侶の大典顕常（1719~1801・以下、大典）は幸い出入りが許されていた。この期間中に行われた大典と朝鮮製述官や書記との筆談は、『萍遇録』と題した筆談集に収められている。《兼葭雅集図》はこの間に書記の一人、成大中が依頼したもので、大典を介して兼葭堂が絵巻の画を、兼葭堂を盟主とする詩社・兼葭堂会の7人が詩文を寄せている。《兼葭雅集図》は通信使一行が大坂を去る前日の1764年5月5日に完成した。大典が南玉らの宿舎に持参したとされるが、『萍遇録』の記録によれば、依頼者の成大中だけでなく、南玉や書記の元重擧、金仁謙なども大いに喜んだという。通信使の帰国後、朝鮮に渡された《兼葭雅集図》は、成大中家に收藏された。

李德懋の記録から

注目すべきは《兼葭雅集図》が朝鮮に渡った後、通信使行に参加していなかった朝鮮の文人たちの間で大いに受け入れられたという点である。当時、《兼葭雅集図》を目にしたのは、成大中と親交のあった文人たちであったと思われるが、必ずしもそれだけではなく、幅広い文人の間で借覧された可能性がある。例えば、同じく庶撃の身分で、実学者であった李德懋（イドクム・1741～1793）の記録からは《兼葭雅集図》に対する高い関心が窺える。成大中宛に送った李德懋の書簡に興味深い記述がある。

兼葭堂図及一百単八図、両令公要弟願借一閱、天下之宝当与知者共鑑賞、亦千古勝絶、惠仮如何少選即当奉還。

（李德懋、「成士執大中」、「雅亭遺稿」卷八（『青莊館全書』卷十六に収録））

³ 《兼葭雅集図》の制作過程については、前掲注1、鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶撃文人、「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」pp.169~176を参照されたい。

記録から李德懋自身はすでに《兼葭雅集図》を目にしていたと推測できる。両令公要弟願借一閱をみると、弟（李德懋）は両令公から《兼葭雅集図》の借覧を頼まれたことが分かる。その両令公が誰なのかは定かでないが、朝鮮社会における令公とは、令監（ヨンガン）、すなわち、官僚、あるいは高官を意味する⁴ため、高官の士大夫であった可能性が高い。それを踏まえると、当時、中国の文人画に見慣れてきた朝鮮文人にとって、日本人による雅集図や詩文が組み込まれている《兼葭雅集図》は目を引くに十分なものであったのではないだろうか。

李德懋は『清脾録』巻一の「兼葭堂」の中で、「余嘗有感於斯言、而得異国之文字、未嘗不拳拳愛之、不啻如朋友之会心者焉。（異国の文字を得るたびに、朋友に出逢ったような気持ちになる）」と日本人の文事に対する自身の想いを綴っている。李德懋がこのように記しているのは、成大中などの朝鮮通信使の経験が日本を訪れることのできなかった李德懋になんらかの影響を与えたことを意味する。さらに、日本人の文事レベルに対する偏見や見方を変えさせられる重要なきっかけをあたえたとも考えられる。実際、李德懋は自身の著書の中で、繰り返し木村兼葭堂や兼葭堂会について言及しているが⁵、注目すべきは、日本人の文事を評価し、従来の日本の文事に対する朝鮮の人の優越意識を批判する記述をも残している点である⁶。そのような意味からも、《兼葭雅集図》は朝鮮文人にとって、日本文人の「現状（今）」を知る貴重な資料として、さらに、共通の文人趣味を嗜む者の連帯感さえ感じさせる資料として機能していたと言える。

先述した李德懋の成大中宛書簡を概観すると、李德懋の成大中の交友関係を窺うことができる。成大中と李德懋は書画の鑑賞のみならず、詩拳の品評や図譜の閲覧、楽器の演奏など、いわゆる文人趣味を嗜む間柄であったことが分かる。興味深いのは、成大中と李德懋が本格的に親交を結び始めたのは 1764 年、日本使行復命後というであるという。成大中が記した李德懋の哀辞の一部の内容を見てみよう。

李懋官哀辞

始余識懋官。因元子才。日本之役。與子才俱道。闕其贈行軸。得一詩序光鈹射人。不可狎視。驚問其誰製。則乃懋官也。及歸即就之。懋官年尚少文弱甚。

（成大中、「昌山成大中士執著」『青城集』卷十）

記録によれば、成大中がはじめて懋官（李德懋）の詩序を目にしたのは、使行中、同じく書記であった元子才（元重擧・1719～1790）を通してであった。その文才に感銘を受けた成大中は帰国後、李德懋と親交を結び始めたという。その親交は後に、成大中の子・成海応の代にまで続いていったが、成大中父子は、李德懋を通して李德懋と親交のあった実学者たちとも交遊をしていた（손혜리, 2011, p69）。実際に、成大中父子は李德懋だけでなく、朴齋家（パクジェガ・1750～1805）、徐常修（ソサンス・1735～1793）などの実学者たちともしばしば書画の制作を行い、その際に、成大中父子は主に序・跋文を書いたという（박정애, 2012, pp.145～146）。このような親交の背景には、成大中、元重擧、李德懋に共通する庶撃という身分的連帯があったと考えられるが、その一方で彼らは優れた文才をもとに、中国の文人文芸に対する高い関心や知識を有していたためであると考えられる。いずれにせよ、18世紀後半、朝鮮社会における文人趣味は士大夫層だけでなく、文事に長じた庶撃層の文人の間でも享受されていたことが明示されよう。その交友の有様については別の論考で詳しく論じていきたい。

最後に李德懋の記録の内、《兼葭雅集図》に関連する記述の変化に注目したい。先述のように李德懋は、著

⁴ 『標準国語大辞典』韓国、国立国語院に拠る。

⁵ 『青莊館全書』巻五十二の「耳目口心書五」と『清脾録』巻一の「兼葭堂」では、兼葭堂が大坂の商人で蔵書家でもあることや、兼葭堂会の人々について紹介し、さらには《兼葭雅集図》に寄せられた詩文と大典の跋文をそのまま載せている。

⁶ 李德懋は、同時、成大中と同じく 1764 年の通信使の書記として参加していた元重擧（ウォンジュンゴ・1719～1790）と親戚関係であった。彼の日本や日本人の文事に対する著述は、元重擧と成大中を通して聞いた話がもとになったと言われている。李德懋は実際に「兼葭堂」（『清脾録』巻一）の中で、従来の日本の文事に対する朝鮮の人の軽視や優越意識への憂いを示した。「朝鮮之俗狹陋而多忌諱。文明之化可謂久矣。而風流文雅。反遜於日本。無挾自驕。凌侮異国。余甚悲之善乎。」

書の中で度々兼葭堂会のことや《兼葭雅集図》について触れている。『青荘館全書』巻五十二の「耳目口心書五」の中では《兼葭雅集図》に寄せられた7人の詩をそのまま引用し紹介している。それに対し、『清脾録』巻一の「兼葭堂」の記述をみると、「今只存葛張詩」〔今はただ儒者で医者で葛蠹庵（葛張）の詩のみが残っている〕と一風変わって記述をしている。このような記述の変化は、《兼葭雅集図》が成大中家に収蔵されたものの、何らかの事情により絵巻全体が保存されたのではなく、別々の状態で保存されていた可能性を想起させる。だが、この記述が物語るもう一つ重要な事柄は、成大中と李徳懋の長年に渡る交遊の有様であろう。

成大中の『青城集』から

次に、《兼葭雅集図》を取り巻く成大中自身の記録をみてみよう。成大中の著述の内、1764年の日本使行と関連するものとして、使行中の出来事を日記形式でまとめた使行録『日本録⁷』がある。だが、『日本録』からは《兼葭雅集図》に関する記録は見当たらない。同時期の筆談記録をまとめた大典の『萍遇録』に《兼葭雅集図》をめぐる成大中と大典の筆談が詳細に記されていたとは対照的である。そのため、ここでは成大中の使行録ではなく、成大中の著書『青城集』から《兼葭雅集図》に関連する記録を取上げたい。

答白陽川書

大中前入日本時。有木世肅者。家居浪華江上。以風流好客称。与同志九人結詩社。嘗有雅集於其所謂兼葭堂者。大中求見其詩。世肅乃図画其雅集而帰之。至今在吾筭。大中於異域之人。

(成大中、「書」『青城集』巻五)

『青城集』巻五の「答白陽川書」によると、成大中は兼葭堂の風流人としての一面や、兼葭堂が志を同じくする9人と兼葭堂会という詩社を結んでいたことを知っていたことが分かる。大事なのは、成大中がその詩会で詠まれる詩の内容を実際に目にしたいと願っていたことである。だが、当時、通信使の製述官や書記が大坂の宿舎を離れ、詩会の行われた木村兼葭堂の書齋である園林・兼葭堂⁸を訪ねることは許されなかった。その次に続く「世肅乃図画其雅集而帰之（そこで世肅（兼葭堂）がその雅集の様子を絵と描いて、それをもって帰国した）」の内容を踏まえると、《兼葭雅集図》は、園林・兼葭堂で行われる詩会の様子や、兼葭堂会の人々の漢詩を実際に見てみたいという成大中の願望に兼葭堂が応える、という形で作られたことが示唆される。大典の『萍遇録』には確かに《兼葭雅集図》の制作過程をめぐる筆談が詳細に記されている。だが、どのような目的で制作するようになったのかについては明らかでなかった。という意味からすると、成大中のこの記録は《兼葭雅集図》の制作目的をはっきり示していると言える。

このように制作された《兼葭雅集図》は、兼葭堂会の人々から成大中に贈答された。金銭的やり取りを介さない、贈答行為は後述するように、成大中にとって重要な意味を持つ。興味深いのは、成大中も書をもって兼葭堂に贈答したということである。酒造業を営んでいた兼葭堂は大坂北堀江瓶橋北詰に酒屋とともに園林・兼葭堂を構えていたが、成大中が《兼葭雅集図》の制作を依頼した同年の1764年、堀江川の埋立・新地開発を機に兼葭堂を新築したとされる（水田紀久、2002、pp.294～295；野間光辰、1973、pp.22～23）。《兼葭雅集図》の絵の中の兼葭堂が旧宅なのか新築の居宅なのかは明らかでないが、成大中の記録によると、成大中が兼葭堂の扁額を書いたことが分かる。

⁷『日本録』は第二巻で構成されているが、第一巻は日記形式、第二巻には、日本の地形や歴史、制度、風俗などを記した、日本見聞録が含まれている。とりわけ、使行の記録を終えた後に、藍島での亀井南冥、西京の那波魯堂に対し「日本の二人の才子について書す」という別の章を設けている。

⁸兼葭堂は木村兼葭堂の堂号である。筆者は拙稿の中で、《兼葭雅集図》の絵の中で空間としての兼葭堂がどのように描かれていたのかを分析した。その際に、書齋より広い、庭園を含む意味として「園林・兼葭堂」と称した。前掲注1、鄭敬珍「《兼葭雅集図》にみる文人世界、18世紀の日韓文人が共有した空間」、なお、この園林・兼葭堂については、野間光辰「兼葭堂会始末」大谷篤蔵編『近世大阪藝文叢談』1973、大阪芸文会にも詳しい。

書東槎軸後

及以文事赴日本。書則非吾職也。然倭人酷愛吾書。動輒求之。始為龜正魯草數紙。又為木世肅書兼葭堂額。

(成大中、「書東槎軸後」『青城集』卷八)

内容を見てみると成大中は記録の中で通信使の書記の役割は、日本人との詩文和唱や筆談を行うことであると明記している。本来なら書を書くのは仕事ではないといいながらも、成大中は使行中、筑前藍島で交遊した儒者・亀井魯（亀井南冥 1743～1813、名は魯、字は道載）と兼葭堂のために書を書いたと述べている。残念ながら、日本側の記録に成大中が兼葭堂の扁額を書いたという記述は今のところ確認できていない。成大中の記録からも扁額を書いた時期は定かでない。しかし、成大中自身の言うように通信使の書記としての役割を離れ、扁額の書を書いたことは、《兼葭雅集図》の制作に対する贈答の意を含んでいると推測できよう。

成海応の「書画雑職」から

ここからは成大中の子・成海応による「書画雑職」から《兼葭雅集図》に関連する記述をみてみよう。成大中の朝鮮帰国後、《兼葭雅集図》が成大中家で家伝していったことや成大中の子・成海応（ソンヘウン・1760～1839）が家伝した収蔵品の跋文を残していることについては後述するが、ここではまず、その中から《兼葭雅集図》と関連する記述を取上げることにする。

題日本牘後

先君子嘗從使事入日本。其國才士多有贈序。雖未能如唐宋古文體裁。然未嘗以功令業為事故無陳腐意。往往蕭散可讀。如木弘、恭井、潛近、藤篤、合離、周奎、浄王之屬。其秀者也。皆不及於竺常。竺常者。日本淡海郡人。為僧於平安山寺。号蕉中。其述鈴木伝藏獄事。精工逼似柳子厚。非近時作家所能及也。日本海舶通江浙。故中国經籍流入最盛。

(成海応、「書画雑職」、『研經齋全集』一六冊)

粉素遥開海外光 浪華雲物尙余香 兼葭隱約湖中舶 図史横縦竹裏房
真跡正堪驚妙手 異才初不限殊方 依依五十年前画 独自流伝在錦囊。

(成海応、「題日本木弘恭兼葭雅集図」『研經齋全集』卷七)

まず、「題日本牘後」で成海応は日本には功令業（科挙に向けた勉強）が無いと述べている。続いて、《兼葭雅集図》に詩文を寄せた人々の名前を列挙しているが、そのなかでも竺常（大典）がもっともすぐれていると評価している。次の「題日本木弘恭兼葭雅集図」は、成大中が《兼葭雅集図》の絵をみて詠んだ詩である。「浪華雲物尙余香」や「兼葭隱約湖中舶」などは《兼葭雅集図》の絵の雰囲気をよく表しているといえるが、「真跡正堪驚妙手」をみると、兼葭堂の巧みな絵の技量を評価している。五十年前画で、錦囊に入れられた状態で保管されたと推測されることから、《兼葭雅集図》が成大中家の収蔵品として成海応の代にまで受け継がれている様が見受けられる。成海応の「書画雑職」については後述することにしよう。

二. 成大中家をめぐって

本章では成大中による《兼葭雅集図》の朝鮮伝来を成大中家の書画収蔵活動と結び付けて検討したい。先述のように、《兼葭雅集図》は成大中の没後、成大中の子・成海応に受け継がれた。注目すべきは、成大中家は先代から書画の鑑賞や収蔵に力を入れていた点である。とりわけ、成大中の父・成孝基（ソンヒョギ・1701～？）の代からは明の『唐詩画譜』を家伝し、朝鮮に見合った画譜作りを試みるほど、絵画への関心が高かったとい

う。成大中や成海応もこのような環境や先代からの影響を受け、書画収集に力を入れていたと言われている⁹。代々受け継がれた成大中家の収蔵書画 110 点については、成大中の子、成海応が著書『研經齋全集』の「書画雑識」で各々の評を残している。

ここではその背景を探るべく、成大中家の面々に注目しながら家を挙げた書画への関心に焦点を当てる。さらに、成大中家の朝鮮通信使との関係や家が科挙の合格者を輩出するために詩社を結成するなど、文事を重んじたことが書画鑑賞や収蔵といった文人趣味とどのように結びついていたのかも検討していきたい。

庶孽文人家としての成大中家

成大中家の面々を取上げる前に、朝鮮社会の特殊な身分である庶孽について触れておこう¹⁰。庶孽とは、主に両班家に生まれた妾の子孫のことを指すが、彼らは嫡子と徹底的に区別され差別をうけた。その差別は、本人の代にとどまらず、代々世襲されていたため、庶孽の数は増え続け、その差別廃止を掲げた庶孽許通が頻繁に起こるようになった。さらには、科挙試験においても文科や武科はもちろん、生員や進士試¹¹をうける機会も制限されていた。朝鮮後期、かろうじて生員や進士試を受ける資格が与えられたものの、良い成績であっても要職につくことは許されず、その結果、庶孽が政治活動に加わることはなかった(박근섭パクギョンスプ、2014、pp.45~46)。

だが、朝鮮の 21 代国王・英祖時代(1724~1776)に入り、庶孽が本格的に登用されはじめ、22 代国王・正祖の時代(1776~1800)になると、王室の図書館兼研究機関である奎章閣(ギュジャンガク)には文才のある庶孽たちが多く登用された。本稿で取り上げている成大中や成海応、李德懋などもその恩恵を受けた人々であり、成大中は通信使から復命した後、1781 年から奎章閣内の書籍の刊行や印文の筆寫などを担当する稿書館の校理として 9 年間仕えた。その間、正祖に文才を認められた成大中は、庶孽としては異例の従三品の高い地位にまで登った。また、成海応もその文才を正祖に認められ、1788 年から奎章閣内の書籍の校正や書寫など担当する劔書官として仕え、父・成大中や李德懋とともに同じ時期に奎章閣で働いた。先述のように、李德懋と成大中との親交が成海応の代にまで続いた理由は、書画への鑑識眼をもとにする成大中の交友関係が成海応にそのままつながったとういうこともあるが、同じ時期に父子が奎章閣で仕えたことも大きく影響をしていたとされる(손혜리ソンヘリ、2011、pp.33~34)。

庶孽の問題を成大中家に即してみると、成大中家は 15 世孫・成後龍(1621~1671)が当時、最高位職の右議政まで上った安東・金氏家¹²の金尙容(キムサンヨン・1561~1637)の側室の娘と結婚して以来、庶孽家になったという。庶孽家とはいえ、強い政治権力を奮っていた安東・金氏家と婚姻関係をもつことにより、成大中家の人々は安東・金氏家の人々と交わりをもつことができたという。とりわけ、士大夫文人であり、安東・金氏家を代表する士大夫文人で蔵書家の金昌集・金昌協・金昌翁との交遊は、成大中家の人にとって文人趣味を享受する土台になったとされている(손혜리ソンヘリ、2013、p170)。

成大中家におけるもう一つ重要な特徴として、朝鮮通信使の製述官、書記との深い関わりが挙げられる。日本人と詩文唱和や筆談を担当する製述官、書記の役割は時代が下っていくにつれその重要性が増し、優れた文才が求められる選抜試験には、国王自らが立ち会うほどであった。成大中家からは成大中を含む 3 人が製述官や書記として日本に出向いたが、1764 年の通信使の書記・成大中の他、1682 年には成大中の曾祖・成琬(ソ

⁹황정연(ファンジョンヨン)は、18 世紀朝鮮の書画収蔵を牽引した人物として、李麟祥、李英裕、李胤永、成大中、朴趾源、徐常修を挙げている(황정연、2011、p72)。

¹⁰前掲注 1. 鄭敬珍「一七六四年の朝鮮通信使からみる庶孽文人、「兼葭雅集図」制作の過程と大坂文人たちとの交遊」では 1764 年の朝鮮通信使の製述官や書記と庶孽身分、さらには、庶孽文人としての一面を取上げ考察した。ここでは、成大中家という庶孽の家について考察をするための背景知識として朝鮮社会における庶孽について説明しておく。

¹¹【生員】科挙の小科の最終日の試験科目である経義に合格した人、【進士】進士、科挙の小科に合格した人。『ポケットプログレッシブ韓日辞典』

¹²朝鮮社会の王権と結びつき権力を振るう勢道家門の代表格であった安東・金氏家は 17 世紀から政治的権力の中心にあっただけでなく、漢陽(今のソウル)の文芸活動を牽引する家として知られている。安東金氏家については、이경주イキョング 2007 『조선후기 안동 김문 연구(朝鮮後期、安東金門の研究)』、イルジ社を参照した。

ンウァン・1639~1710)が製述官として参加し、1719年には成大中の祖父・成夢良(ソンモンリャン・1673~)が書記として活躍した。このように一家から3人も製述官や書記として選ばれた事例は、他に見られないとされている。早くから異国の風土や文物、人々に触れることのできた彼らの通信使行の経験は、成大中家の後代にも伝えられていったと考えられる。

その一方で、成大中家が書画や文事に高い知識を有することができたのは、科挙とも関係がある。成大中や成海応が英祖や正祖時代における庶孽登用制作の恩恵を受けたと上述したが、成大中家は士大夫家に負けないほど、多数の科挙合格者を輩出していた。具体的には、16世孫・成琬から22世孫・成駿英(ソングンヨン・1817~1835)に至るまで、いずれの代においても科挙の合格者を輩出し、のべ15人が合格している。손혜리は、成大中家の人々が16代から22代までの76年間に4回に渡る詩社結成を通して、功令業(科挙の科文勉強)を教えていたことが科挙合格者の輩出につながったと分析した(손혜리, 2013, p169)。

成大中家で長年の間、結成されたこの詩社は、青城詩社と呼ばれる¹³。青城詩社は彼らの故郷・青城(今の抱川・ポチョン)を拠点にして1748年、第一回の詩会を行った。そこには成大中も参加しており、その年の科挙試験では成大中をはじめ科挙を受けた4人全員が合格している。その後、1774年には成大中が中心となり第二回の詩会を開き、その結果、成海応をはじめ12人が進士試に合格した。1813年に第三回の詩会が、1824年には第四回の詩会がそれぞれ行われたという(손혜리, 2013, pp.185~188)。青城詩社は、科挙試験用の学習を主な目的とする購読会の性格を色濃く呈していた。18世紀朝鮮の文人詩社は、最初、購読会の目的で結成する場合がしばしばあり、購読会からそのまま文人詩社へと展開することもあった¹⁴(안대희, 2013, p428)。もっとも、都・漢陽でない青城という地方で、様々な世代の家の者同士が集い、詩社を結成していた点は注目に値すると言えよう。

さらに、成海応の記録からは、青城詩社に対する成大中家の自負の意を窺うことができる。

自蘭亭修楔之後、如樂天之香山、文富司馬之洛陽、至於蘇黃諸子西園之會、皆極其一時之盛、而未聞其続成而不絶、如吾郷之詩社。

(成海応、「詩社記」、『研經齋全集続集』卷十一)

ここで成海応は青城詩社を中国の蘭亭修楔¹⁵や北宋時代の文人の集い・西園雅会と比べながら、このような中国の雅会が一時的な集いに過ぎなかったのに対し、青城詩社は長年続いたと強調することで成大中家の詩社に対する誇りを表わしている。そこからは青城詩社が単なる科挙の勉強をするための場としてではなく、文人的風流を享受する場として機能していたことが読み取れるだろう。成大中家における青城詩社の意義は、科挙に合格する「人材の育成」にあったと言えるが、そこで培われた高い学問的教養は、科挙合格のために止まらず、先述のような書画に対する高い関心や知識を通して、文人趣味を享受する風土を育てていったと推察できる。

成大中家の書画收藏と「書画雑職」

上述のように、成大中家は家を挙げてとっていいほど、科挙への合格に力を入れてきた。その結果として、庶孽家とはいえ成大中家の人々の長けた文才は時代の流れとも相まって、朝鮮通信使や奎章閣で活躍する機会をつかむことができた。ここからは成大中の家の書画への関心や收藏活動についても考察を加えたい。成大中

¹³ 青城之名文郷者由詩社始、昔在英宗戊辰郷中耆宿、以功令業結社、課少長業既成。(成海応、「詩社記」、『研經齋全集続集』卷十一) 英宗戊辰は1748年である。

¹⁴ 購読会を出発点とする文人詩社は、士大夫家からも見られるが、代表的には洪鳳漢家の例が挙げられる。洪鳳漢は息子・洪樂仁、洪樂任、洪樂倫を中心として購読会を開き、その会は次第に、彼らを指導した盧命欽、盧兢父子や庶孽・李明五、中人・趙秀三なども集う身分を越えた詩社として発展していった(안대희, 2013, p428)

¹⁵ 【蘭亭の会】中国東晉の穆帝の永和九年(三五三)三月三日、王羲之、謝安ら当時の名士四一人が蘭亭に集まって、禊をし、詩を賦した会をいう。『日本国語大辞典』

家の書画への関心は、成海応の「東詩画譜序」からも窺うことができる。とりわけ、成大中の父・成孝基は明代に刊行した『唐詩画譜』を入手し、それを家蔵品として受け継がせていたという。

『唐詩画譜』は17世紀の明代に刊行された画譜であり、その朝鮮伝来は、1623～1624年頃と推測されている(허영환, 1991, p135)。朝鮮の文人画家・尹斗緒(윤즈소・1668～1715)が若い頃『唐詩画譜』と『顧氏画譜』に倣って唐絵を描いていたことや、1721年の中国燕行の際に文臣・李正臣(이정신・1660～1717)が記した燕行録に『唐詩画譜』を朝鮮に持ち帰ったという記述がある。(이태호, 1992, p145)。『唐詩画譜』は日本においても1672年に和刻本が刊行され、1710年に再刻されるなど画壇に影響を及ぼし、池大雅も『唐詩画譜』を模範としたとされている(板倉聖哲, 2005)。朝鮮における画譜類の伝来は、燕行に参加した人々が琉璃廠などの骨董品や古本屋町に立ち寄り、書籍や書画を買ってくるというものが主たる入手経路であった(한정희, 1995, pp.73～75)。成孝基がどのようにして『唐詩画譜』を手に入れたのかは明らかになっていないが、成孝基が活動していた時期に、文人画家あるいは燕行に参加していた人々から『唐詩画譜』を入手していた可能性は十分あると考えられる。

注目すべきは、「東詩画譜序」の中で成海応がいつているように、成孝基が『唐詩画譜』に習い、朝鮮の状況に見合った画譜作りを試みたという点である。

昔先王考嘗抄東詩之合画料者、欲借當時善書画者、以追華人所纂唐詩画譜者未果、舍弟鵬之乃能成之、然有詩矣而有筆為難、有筆矣而有画為尤難、夫絶芸常難並聚、是以所得不過数十本、余以先王考之所欲成者、故為之書卷首、王考之所欲成者故為之書卷首
(成海応、「東詩画譜序」、『研經齋全集』卷十三)

内容をみてもみると、先王(成孝基)は、当時、書画を善くする人の力を借りて、中国の『唐詩画譜』を真似たものを作ろうとしたが叶わず、成海応の弟(成海運)がそれをやがて成し遂げたと言っている。だが、数十本の絵や詩を得るに過ぎなかったという。

上記の内容が示しているように、成孝基が朝鮮に見合った画譜作りを目指していたことは、彼が詩・書・画に対する高い知識や関心を持っていたことを意味するが、書画を善くする人の力を借りて作ろうとしたことを踏まえると、書画を媒介にした交友関係があったことが想起されよう。そのような書画に対する関心や交友関係は、成孝基の代に止まらず、その意に従って画譜作りに挑んだ成海応の弟に至るまで続いていったと考えられる。だが、結局、数十本のものしか得ることができなかったという記述は、後述するように成大中家が収蔵していた書画のほとんどが購入したものではなく、贈答によるものであったことの裏付けでもあろう。

ここからは、成海応の「書画雑識」を概観することを通して成大中家の収蔵活動や収蔵の経路などを探りたい。成海応は著書『研經齋全集統集』の「書画雑識」の中で朝鮮のみならず、中国や日本の書画を含め、のべ110点に題跋を残している。박정애の分類によると、書の題跋が85点、絵画の題跋が25点である。また、国別には、朝鮮の作品が書画合わせて70点、中国が36点、日本が4点である。日本の4点のうち3点が書で、絵画は1点、《兼葭雅集図》である。全体的に書に比べ、絵画が少ない理由については、書は成大中以前の先代から受け継いだものが多く占めている一方、絵画の場合はその大半が18世紀に活躍した画家によるためであるという(박정애 박종호, 2012, pp.150～152)。その事実は、成大中や成海応の代に入り絵画収蔵が本格化したことを物語っている。その背景には、18世紀後半、顕著となった朝鮮の書画収蔵ブームの影響もあったと考えられる。この時期、漢陽に居住する士大夫である京華士族が中心となり、雅会の画や山水記念画など、注文画制作が盛んに行われ、書画鑑賞が依然として加熱していたことはすでに先行研究で論じられてきた¹⁶。박정애は成大中家の絵画収集の経路について、庶撃家の成大中家の家産が豊かではなかったため購入による収蔵ではなく、ほとんど贈答や金銭のやり取りを用いない贈物によって行われていたと指摘している(박정애, 2012, pp.155～156)。そのような意味から、成大中家の収蔵品のうち、唯一日本の絵画である《兼葭雅集図》の収蔵

¹⁶ これについては、조규환(ジョギョヒ)の論考に詳しい。引用・参考文献を参照されたい。

は成大中個人の文人趣味の枠を超え、家業としての書画収蔵に対する強い意識が底流にあったことを示唆する。さらに、成大中をはじめ朝鮮の庶撃文人たちと兼葭堂会の人々と交遊を通して《兼葭雅集図》が贈答し、成大中家に収蔵されたことの有する意義は大きいと言えよう。

おわりに

本稿では1764年作《兼葭雅集図》からみる18世紀、成大中という朝鮮の庶撃文人、並びに成大中家の家業としての書画収蔵の意味合いについて検討を進めて来た。本稿は成大中が日本人との詩文や筆談を担当する通信使の書記の役割を超え、どのような目的をもって兼葭堂会の人々に《兼葭雅集図》の制作を依頼したのかという問いかけからはじまったものである。

そのため、まず李德懋や成大中、成海応の記録から《兼葭雅集図》が朝鮮の文人にどのように受け止められていたのかを分析した。成大中の記録からは、『萍遇録』では明らかでなかった《兼葭雅集図》の制作目的が浮き彫りになった。ならびに、李德懋や成大中の親交のきっかけとなったのが1764年の通信使行であり、《兼葭雅集図》も交遊の媒介として用いられた点は示唆に富んでいると言える。

さらに、《兼葭雅集図》の制作は、成大中個人の文人趣味によるものではなく、成大中家に受け継がれた書画収蔵という家業とも関わりを持っていた可能性も探ってきた。言い換えれば、成大中家の書画収蔵は、朝鮮後期の知識人家における文人意識の表れの一端として捉えることもできよう。それを可能にした背景には、先述のように庶撃家とはいえ、安東・金氏家の人々との交遊により文人趣味を享受する上で必要な土台が形成されたこと、成大中の父・成孝基により『唐詩画譜』が家伝し、朝鮮の画譜制作を試みていたことなどがあつた。加えて、76年間に渡り続いた成大中家の詩社・清成詩社の結成は士大夫家に劣らない科挙の合格者を輩出するなど、成大中家の人材育成と文人趣味享受に大きな影響を与えたことが分かる。このような書画や文人趣味の享受のために必要な知識を身につけられる環境の中で育てられた成大中と成海応が絵画の蒐集に力を入れたのは、自然な流れであつたのだろう。特に強調したいのは、成大中家の収蔵品のほとんどが、金銭を介さない、贈答によるものである点である。

成大中にとって朝鮮通信使への参加は、日本の文人と触れ合う好機であり、まさに日韓両国文人の交遊を通して贈答された《兼葭雅集図》の朝鮮伝来は、成大中や成大中家にとって重要な位置を占めず出来事であつたと考えられる。同時に、贈答や借覧に頼ることの多かつた朝鮮社会における庶撃文人の交遊の有様も見て取れるだろう。

別の角度から言えば、成大中の先代も朝鮮通信使の製述官や書記として2人が日本の文人たちと触れていたと思われるが、成大中の代に入り《兼葭雅集図》が制作されたことは18世紀中期における日本人の文事レベルの向上を物語っている。ひいては、1764年という18世紀中期の朝鮮と日本における文人世界では、詩社結成を通して詩を詠み、文人空間を描くなどの共通した文人趣味の享受の文化が存在していたことも再確認できるのだろう。なお、成大中家の収蔵活動が朝鮮後期の知識人家の書画収蔵といかなる同異をみせているのか、並びに、個人の枠を越えた朝鮮社会における文人意識と家の問題などについては今後の課題として取り組んでいきたい。

引用・参考文献

板倉聖哲 2005 「形態の伝承」『講座日本美術史』、東京大学出版会

高橋博巳 2007 「통신사 · 북학파 · 췌카도(兼葭堂) (通信使 · 北学派 · 兼葭堂)」

『朝鮮通信使研究』4号

高橋博巳 2009 『東アジアの文芸共和国:通信使 · 北学派 · 兼葭堂』 新典社

高橋博巳 2011 「ソウルに伝えられた江戸文人の詩文-東アジア学芸共和国への助走-」 笠谷和比古『一八世紀日

本の文化状況と国際環境』思文閣出版

- 高橋博巳 2013 「通信使行から学芸の共和国へ」 染谷智幸、崔官『日本近世文学と朝鮮』勉誠出版
- 高橋博巳 2014 文人研究から学芸の共和国へ』『二松学舎大学人文論叢』93号
- 仲尾 宏 2011 「篆刻家・沢田東江と「多胡碑」の朝鮮、中国への伝播」東アジア文化研究第49号、韓国、韓陽
大学東アジア文化研究所
- 野間光辰 1973 「兼葭堂会始末」大谷篤蔵編『近世大阪藝文叢談』、大阪芸文会
- 水田紀久 2002 『木村兼葭堂研究:水の中央に在り』、岩波書店
- 김성진キムソンジン 1996 「南玉의 生涯와 日本에서의 筆談唱和」
『한국한문학연구』19号
- 김성진キムソンジン 2010 「癸未使行時の 筆談唱和와 大阪의 混沌社」
『한국문학논총』54号
- 김성진キムソンジン 2011 「계미사행단(癸未使行團)의 대관체류기록(大阪滯留記録과 대전선사(大典禪師)
축상(竺常)」『동아시아 문화연구』49号
- 금지아グンジア 2008 「朝鮮後期 唐詩詩意圖에 나타난 朝鮮風 南宗文人畫의 실천과 변용 (朝鮮後期、唐詩
詩意圖に表れた朝鮮風南宗文人画の實踐と変容)」中国語文学論集第50号、中国語文
学研究会
- 박균섭パクギュンソプ 2014 「서열 지식인의 삶과 삶 (庶擊知識人の知と生涯)」
人格教育卷8、韓國人格教育学会
- 박정애パクジョンエ 2012 「研經齋 成海應의 書畫趣味와 書畫觀연구:「書畫雜識」를 중심으로」진단학보 제
115호 진단학회
- 박정애パクジョンエ 2013 「「서화잡지(書画雜識)」를 통해 본 성해응(成海應)의 회화감평(繪画鑑評) 양상과
의의」オンジ論叢卷33、オンジ学会
- 박효은パクヒョウン 2002 「18세기 朝鮮 文人들의 繪畫蒐集活動과 畫壇」美術史学研究第233号、韓國美術史
学会
- 손혜리ソンヘリ 2011 『연경재 성해응 문학 연구』、ソミョン出版
- 손혜리ソンヘ리 2013 「과거를 통해 본 조선후기 서열가의 學知생성과 家學의성립
(科擧からみる朝鮮後期庶擊家の學知の生成と家學の成立)」
大東漢文学会誌38卷、大東漢文学会
- 안대회안데페 2013 「18세기시사의 현황과 전개양상 (18世紀における詩社とその展開様相)」古典文学
研究卷44、韓國古典文学会
- 이경구이킵룡 2007 『조선후기 안동 김문 연구 (朝鮮後期、安東金門の研究)』
、イル지社
- 이태호이테호 1992 『조선후기 그림과 글씨 (朝鮮後期の書と画)』학고재
- 정장식ジョン장식 2004 「英祖代 通信使와 李德懋의 日本 研究」
『일본문화학보』23号
- 정혜린ジョン헤린 2007 「성해응의 그림을 보는 눈 (成海應의 繪画を見る目)」
文献と解釈第41号、文献と解釈社
- 조규희조규희 1998 「朝鮮時代의 山居圖」美術史学研究第217・218、
韓國美術史学会
- 조규희조규희 2001 「17·18세기의 서울을 배경으로 한 文會圖」
소울学研究第16号、소울市立大学소울学研究所
- 조규희조규희 2006 『朝鮮時代 別墅圖 研究』소울大学博士論文
- 한정희한정희 1995 「朝鮮後期 繪畫에 미친 中國의 영향」美術史学研究卷206、
韓國美術史学会

황정연 ファンジョンヨン 2011 「19세기 조선의 서화수장과 중국서화의 유입 (19世紀、朝鮮の書画所蔵と中国書画の流入)」

허영환 호ヨンファン 1991 「唐詩畫譜 研究 - 中國의畫譜2」美術史学卷3、美術史学研究会

引用原文の出典

成大中 『青城集』 韓国古典翻訳院所蔵

成海応 『研經齋全集』 韓国古典翻訳院所蔵

大典 『萍遇録』 韓国国立中央図書館所蔵、筆写本

李徳懋 『青莊館全書』 韓国古典翻訳院所蔵